初級で一度学んだ形式の取り扱いについて
――実現可能と無意志動詞と有対自動詞の関係を例に――

村　上　佳　恵

論文要旨

近年、日本語教育では、ある一つの形式が初級で一度扱われると、その形式に異なる用法があるにもかかわらず、その形式はすべて既習の項目として扱われてしまうということが問題視されている。では、初級で一度学んだ形式をどのように再度取り上げていけばよいのだろうか。本稿では、初級で一度学んだ形式を機能別に整理し、同じ場面で使われる形式を一緒に扱うことを提案する。

以下では、「逆立ちができた。」のような「実現可能」を例として取り上げる。この文は、「子供のころ、逆立ちができた（＝逆立ちをする能力を持っていた）」という「過去時の潜在的な能力を表す」という解釈のほかに、「昨日初めて、逆立ちができた（＝逆立ちをした）」という「過去時に実際に逆立ちをした」という解釈がある。後者が「実現可能」と呼ばれる用法である。まず、コーパスを用いて実現可能の用例が少ないことを明らかにする。そして、実現可能が必須である場面を明らかにし、その場面では、無意志動詞と有対自動詞が使われるのが普通で、実現可能は、無意志動詞と有対自動詞の穴を埋めるものであることを述べる。そして、そのために実現可能の用例が少ないことを指摘する。それを踏まえ、日本語教育においては、無意志動詞、有対自動詞、実現可能の３つを動作主が自分の動作について動作を行う時点では、「できるかどうかわからなかったがやってみた。そして、どうなったかを述べる」という場面で一緒に扱うことを提案する。

キーワード【実現可能、無意志動詞、有対自動詞、初級で一度学んだ形式】

1. 問題の出発点

日本語学習者の誤用に、可能形を用いたほうが自然なところに、可能形を用いない例が報告されている。(1)－(4)は、すべて可能形を用いたほうが自然である[1)]。

（１）?タイに行った結果、新しい友達をたくさん作った。（作れた）

（２）?厳しい先生の下で勉強したので、よい論文を発表した。（発表できた）

（３）?鼻をつまんだら、嫌いな納豆を食べた。（食べられた）　（(1)－(3) 大場 2012）

（４）?頑張った結果自分が望んでいた会社に入りました。

（YNU 書き言葉コーパス R_task_05_C061[2)]）

(1) – (4)は、以下で詳述するが「実現可能」と呼ばれる可能形の用法である。(1) – (4)の誤用は、なぜ生まれるのだろうか。

2. 先行研究

2-1　実現可能とは？

(1) – (4)のような過去のある一時点において動作が成立したことを述べる可能表現は、「実現可能」と呼ばれ、潜在的な能力を表す「潜在可能」と区別されている（渋谷 1993、尾上 1999 等）。次の(5)は現在時の潜在的な能力を、(6)は過去時の潜在的な能力を述べるもので、違いはテンスのみである。しかし、(7)は、「昨日」、実際に「逆立ちをした」と解釈される。この「逆立ちをする」という動作が過去のある一時点において実際に成立したという解釈が実現可能であり、(8)の無標の動詞を用いた「逆立ちをした」との違いが議論されてきた。

（5）　私は逆立ちができる。
（6）　私は子供のころ逆立ちができた。
（7）　昨日、逆立ちができた。
（8）　昨日、逆立ちをした。

林（2007）は、実現可能文と無標の動詞文を比較し、両者は「『主体の一回的な行為の実現』を表わす点で共通しているが、前者は〈事象が主体にとって好ましく、かつ得難い〉というプラスの意味特徴を持っているのに対して、後者は〈事象が過去に生起した〉というニュートラルな意味」を持つと述べている。林（2007）に従うと、(7)は、「逆立ちをすること」は主体にとって好ましく、かつ得難い出来事であり、それが実現したと述べるものである。一方の(8)は、ただ「逆立ちをする」という出来事が過去に実現したことを述べている。

川村（2004）では、実現可能を「意図成就」と呼び、「『行為の実現』如何に注目しており、『行為者が意図をもって行為を仕掛けた』こと自体は背景に押しやっている」表現であるとしている。大場（2012）も、実現可能文の用法を「動作主の意図と事態実現の成否とを切り離して述べるもの」とし、「動作主の意図が発動されてもその事態成立が困難であると考えられている場合」および「動作主の意図については特に言及せず、結果的に見て通常実現しがたい事態が実現したことを述べる場合」に「特に実現可能文を用いる可能性がある」としている。

ところで、実現可能は、初級の日本語教育では文型としては扱われていないことが多い。村上（2015）は、初級の日本語の教科書 16 種の可能形の扱い方を調査し、潜在可能は 16 種

すべての教科書で扱われているが、実現可能を文型として扱う教科書は6種のみで、例文は、すべて否定で肯定の例文がないことを報告している。そして、実現可能を潜在可能とは別に文型として扱うべきであると主張している。本稿では、実現可能が初級で文型として扱われていない現状を踏まえ、中級以降でどう扱うかという観点で論じていきたい。

2-2　実現可能の使用頻度

先に、村上（2015）で初級の教科書の実現可能は、例文がすべて否定で肯定の例文がないと指摘されていると述べたが、肯定の実現可能は、教科書で扱う必要がないほど使用されないのだろうか。渋谷（1993）は、可能表現について論じるなかで、「可能表現における肯否の非対称性」として、文献および現代諸方言で否定のほうが多く用いられることを指摘している（p.235）。もし、肯定の使用が少ないのであれば、それはどうしてだろうか。本稿では、可能表現は否定が多いのか、実現可能がどのくらい使用されているのかを『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）を用いて調査を行う。その結果として、肯定の実現可能は、無標の動詞と比較して用例数が少ないことを指摘し、なぜ、実現可能の用例が少ないのかを論じる。そのうえで、先行研究の知見を活かし、実現可能を無意志動詞・有対自動詞と同じ場面で用いられるもの（つまり、同じ機能を持つもの）として扱うことを提案する。

3. 可能表現の使われ方

BCCWJ を用いて、可能表現は肯定より否定で多く使用されるのか、肯定の過去形の可能表現はどのくらい使用されているのか、調査を行った（実現可能の用例数ではなく、肯定の過去形の可能表現の用例数を示すのは、過去時の潜在可能か実現可能かの判断が難しい例があるためである）。調査対象は、BCCWJ の出版サブコーパスのコアデータと非コアデータの固定長データ（検索対象語彙数 8,480,815（空白・記号・補助記号を除く））を対象に、コーパス検索アプリ中納言を用いて、短単位検索を行った。以下の表 1 の 18 語の動詞について、無標の動詞と可能表現（可能形と、～こと（が・は・も）できる）の普通体と丁寧体の終止用法の例を収集した。18 語の動詞は、東京外国語大学留学生日本語教育センター編『初級日本語　下』の動詞のリストから、人間が主語になり可能形でも使われる動詞を任意に選んだものである。そして、「商売が軌道に乗る」のようなガ格名詞句がモノの例は、可能表現が使われる可能性はないため除外した。また、「～ていける」「～ていく」のような補助動詞も、すべて除外した[3)]。

3-1　可能表現は肯定より否定で多く使用されるのか

はじめに、可能表現は肯定より否定で多く使用されるのか見てみよう。表 1 に、無標の動

詞と可能表現の肯否別の用例数（非過去と過去の計）と否定出現率（肯定 1 例あたりの否定の出現率）を示す。

可能表現の肯定と否定を比較すると、否定のほうが多いのは、網掛けで示した 8「眠る」と 11「話す」だけであり、否定が多いとは言えない。しかし、無標の動詞と可能表現の否定出現率を比較すると、網掛けで示した 3「泳ぐ」と 15「着る」以外は、可能表現のほうが否定出現率が高い。以上のデータからは、可能表現は、否定が肯定より多く用いられるとまでは言えないが、無標の動詞と比較し否定が使われる割合が高いと言える。

3-2　肯定の過去形の可能表現はどのくらい使用されているのか

可能表現は、無標の動詞と比較して否定が使われる割合が高いことを見たが、「会えた」のような肯定の過去形の可能表現は、どのくらい使用されているのだろうか。表 2 に、無標の動詞と可能表現、それぞれの肯定の過去形（タ形）の用例数を示す。表 2 を見ると、いずれの動詞でも無標のタ形が圧倒的に多く、過去形の可能表現は少なく、ひいては実現可能も少ないと言える。

表 1　無標の動詞と可能表現の否定出現率

		無標の動詞			可能表現		
動詞		肯定	否定	否定出現率	肯定	否定	否定出現率
Ⅰ	1　会う	121	9	0.07	30	15	0.50
	2　行く	917	69	0.08	54	35	0.65
	3　泳ぐ	12	0	0.00	0	0	0.00
	4　買う	195	22	0.11	38	15	0.39
	5　書く	346	21	0.06	36	17	0.47
	6　聞く	858	53	0.06	23	19	0.83
	7　飛ぶ	32	0	0.00	2	2	1.00
	8　眠る	28	8	0.29	10	27	2.70
	9　飲む	234	12	0.05	15	3	0.20
	10　乗る	107	14	0.13	12	7	0.58
	11　話す	485	27	0.06	14	17	1.21
	12　弾く（ひく）	8	1	0.13	16	6	0.38
	13　持つ	287	39	0.14	40	28	0.70
Ⅱ	14　起きる	22	2	0.09	1	1	1.00
	15　着る	47	5	0.11	7	0	0.00
	16　食べる	253	27	0.11	80	22	0.28
	17　寝る	54	3	0.06	4	3	0.75
Ⅲ	18　来る	359	57	0.16	2	2	1.00

表 2　無標の動詞と可能表現の肯定過去形の用例数

動詞		無標タ	可能表現タ	動詞		無標タ	可能表現タ
1	会う	121	7	10	乗る	28	5
2	行く	246	4	11	話す	221	0
3	泳ぐ	3	0	12	弾く（ひく）	3	0
4	買う	92	5	13	持つ	57	3
5	書く	185	3	14	起きる	6	0
6	聞く	425	7	15	着る	6	0
7	飛ぶ	16	0	16	食べる	60	7
8	眠る	28	8	17	寝る	18	2
9	飲む	82	1	18	来る	188	2

4. なぜ実現可能の用例は少ないのか

前節で、実現可能の用例が少ないことを見たが、なぜ、実現可能の用例は少ないのだろうか。第 4 節では、実現可能が必須であるのは、どのような場面かを明らかにする。そして、実現可能の用例が少ないのは、実現可能が必須である場面が、無意志動詞と有対自動詞が使用される場面であり、実現可能は当該の動作を表す無意志動詞と有対自動詞がない場合に用いられるからであるということを述べる。

4-1　実現可能が必須である場面

先行研究で明らかにされているように、実現可能は「『行為の実現』如何に注目しており、「行為者が意図をもって行為を仕掛けた」こと自体は背景に押しやっている」表現（川村 2004）である。では、実現可能が必須となるのは、どのような場合だろうか。それは、動作主が自分の動作を「成立するかどうか自分では決められない」と捉えていることが明示された場合で、以下の 2 つに下位分類される。なお、4-1 の用例は、書籍とインターネット上のブログからのもので、出典が無い例は作例である。

a．動作の成立が自分の力ではなく他の要因によることが明示された場合

（9）　地獄のような実父との獣じみた生活から、この新しい両親のおかげで｛抜け出せた／?抜け出した｝、ということは充分にわかっていたはずだ。　（月神）

（10）「私は運よく壁の向こうに｛行けました／?行きました｝。しかし、私の友人・知人の多くは、未だ高い壁に遮られてみじめな生活を送らざるを得ない境遇にいるんです。（以下略）」　（高学）

(11)　会社に入ったのも得だった。（中略）会社に勤めたのは、ごく単純に、食えなくなったからだった。歯車の一つになったのだろうか。そういう見方もあろう。まず、社規によってしばられる。一定の時間、会社にいなければならない。けれども、そこには仕事があった。たとえば、フリーでいると、仕事は毎日、目の前にあるわけではなく、仕事を得るのにエネルギーが要った。仕事を獲得するのでさえ〃仕事〃だった。毎日、顔を出せば仕事があるというのは、一種の感動であった。〃仕事が出来る！〃それだけでホッとしたのだった。次には、いろんな人と｛付き合えた／?付き合った｝。仕事の裏をのぞけもした。　（ムツ）

(9)－(11)は、すべて下線部の動作がそれぞれ「両親」「運」「会社に入ったこと」によって成立したと述べられている。このように、動作の成立が自分の力ではなく他の要因によることが明示された場合は、実現可能が適切である。

b．動作の成立が困難であることが明示された場合

(12)　目を開けて、テーブルの上のナイフを手に取った。絆創膏を巻いたせいで右手の人差し指をうまく曲げ伸ばしできない。けれど、刃は、拍子抜けするぐらい簡単に｛引き出せた／?引き出した｝。　（ナイ）

(13)　ハーモニカを渡されて、うまく吹けるかどうかわからなかったけれども、吹いてみたら、なんとか｛吹けた／?吹いた｝。

(12)(13)は、「右手の人差し指をうまく曲げ伸ばしできない」、「うまく吹けるかどうかわからなかった」と述べることにより、実線部の動作の成立が困難であることが明示されている。このような場合も、実現可能が適切である。また、次の(14)は、「意外にたやすく」という副詞句で、動作の成立が想像より容易であったことを述べている。これは、つまり、やってみる前は困難であると思っていたということであり、(12)(13)と同様に、動作の成立が困難であることが明示されているため、実現可能が適切になる例であると考えられる。

(14)　「でも、万が一そうだったとしても、今の私とおんなじように暮らしてるんだよね。ごはん食べて、怒ったり笑ったりして、夜になったら眠って」この古い、素っ気ない建物のなかで暮らす自分は、意外にたやすく｛思い描けた／?思い描いた｝。　（八日）

以上、実現可能が必須となる場合のは、a. 動作の成立が自分の力ではなく他の要因による

ことが明示された場合と、b. 動作の成立が困難であることが明示された場合であることを見てきた。この２つは、動作主が自身の動作を「成立するかどうか自分では決められない」と捉えていることが明示された場合であるとまとめることができる。a の動作の成立が他の要因によるものであるということは、すなわち、自分では動作の成立の可否を決められないということである。また、b. のように、成立が困難であれば、成立するかを動作主が決めることはできない。(9) – (14) では、波線部で動作主が自分の動作を「成立するかどうか自分では決められない」と捉えていることを明示しており、実線部のように無標の動詞に言い替えると不自然である。そして、波線部がなければ、実線部の無標の動詞も適格であると思われる[4)]。以上のことから、動作主が自身の動作を「成立するかどうか自分では決められない」と捉えていることが明示された場合、実現可能が必須となると言える。

4-2　実現可能が必須の場面で現れる他の形式

ところで、先に見た実現可能が必須の場面では、実現可能以外の形式も現れる。

(15)　理解できるかわからなかったが、何度も何度も読んでみたら、内容がわかった。

(16)　いっそのこと買替も考えましたが、そこは機械いじりの好きな私ですので、自分で修理できないかネットで検索すると、やっている方がいらっしゃいますね。分解を説明しているサイトを見ながら、私もちょっと、蓋を開けてみたところ案外簡単に開きました。

（http://pup.doorblog.jp/archives/46142581.html　2016 年 8 月 28 日）

本来、「成立するかどうか自分では決められない」と捉えている動作が成立したことを述べる場合、(15) のような無意志動詞や、(16) のような有対自動詞が用いられるものと思われる。無意志動詞は、主格名詞句の意志が及ばない出来事を描くものであるから、「成立するかどうか自分では決められない」ことを無意志動詞で表現するのは、ごく自然なことである。無意志動詞には「慣れる」等の他、「間に合う」「うまくいく」等の動詞句がある。

有対自動詞とは、次の (17) (18) のように、形態的・意義的・統語的な対応関係が成り立つ他動詞を持つ自動詞のことである（早津 1987）。

(17)　　針金が曲がる。

(18)　子供が針金を曲げる。　（早津 1987）

早津（1987）は、有対自動詞を「働きかけによってひきおこしうる非情物の変化を、有情物の存在とは無関係に、その非情物を主語にして叙述する動詞」としている。つまり、自動

詞と他動詞のペアがある場合、有対他動詞で表される動作を「成立するかどうか自分では決められない」と捉えていて、その結果どうなったかを述べる場合は、成立したかどうかが注目され、物を中心に述べる有対自動詞使われるのである。例えば、セーリム（2014）は、以下のような場面で他動詞の可能形を使うか、自動詞を使うか、日本語母語話者50人を対象に、調査を行っている[5)]。

【場面 1】田中さんは、ジャムの瓶の蓋を開けようとしています。
田中：ウッ！
木村：どうしたの？
田中：ジャムの蓋、開（あ）＿＿＿＿＿＿＿ない。
木村：蓋に輪ゴムをはめてみたら？
田中：そうだね。やってみる。
・・・・・・・・
木村：どう？
田中：あ、開（あ）＿＿＿＿＿＿＿た。ありがとう。

そして、上記の「開＿＿ない」を「実現不可能」、「開＿＿た」を「実現可能」と呼んでいる。この場面は、本稿で言う動作主が自身の動作を「成立するかどうか自分では決められない」と捉えている場面である。そして、実現可能の場面では、自動詞が 95%、他動詞の可能形が 5%というデータを示している。このデータから、このような場面では、多くの母語話者が自動詞を用いるということが言える。以上、動作主が自身の動作を「成立するかどうか自分では決められない」と捉えていて、その動作が成立したかどうかを述べる場合は、無意志動詞か、有対自動詞が用いられることを見てきた。

しかし、「成立するかどうか自分では決められない」と捉えている動作が、すべて無意志動詞か有対自動詞で表現できるわけではない。「走る」「食べる」等は、意志動詞であるが、これらの動詞で表される動作を「成立するかどうか自分では決められない」と捉えることもある。そして、「走る」「食べる」を無意志動詞または有対自動詞で表すことはできない。そこで、動作が成立したかに注目をする実現可能が使用されるのである。

ここで、自動詞と可能形の関係に言及した早津（1989）を見ていこう。早津（1989）は、生産を表す他動詞がほとんど無対他動詞であることを述べ、そのことに「働きかけによってできあがった生産物を主語にしてその状態を述べるものとして、自動詞『できる』や各々の他動詞の可能形を用い得ること」が関連していると思われると指摘している。

（19）　妻が夕食を作った　―――　夕食ができた。

（20） 女の子がセーターを編んだ ――― セーターができた／セーターが編めた。

（(19)(20) 早津 1989）

この指摘は、自動詞と他動詞のペアの穴を可能形が埋めているという指摘と見ることができる。有対自動詞と実現可能は、動作の実現（有対自動詞は実現による変化）に注目するという点で共通するのである。

以上の議論から、動作主がある動作を「～しよう」「～たい」と思い、動作を行い、その動作が行われたかどうかを述べる場合、動作を行う際に「実現が明らか」であると捉えるか、「実現が不明」であると捉えるかにより、どのような形式が用いられるかをを図１に示す。

動作主が自分の動作について、動作の実現が明らかであると捉えていれば、①意志動詞（無標の動詞）で述べる。実現が不明で無意志動詞がある場合は②無意志動詞が用いられる。実現が不明で意志動詞の場合は、対応する有対自動詞があれば③有対自動詞、有対自動詞がなければ④実現可能が用いられる。この図で示したいのは、無意志動詞と有対自動詞と実現可能は、同じ場面で用いられる、つまり、同じ機能を持つということである[6)]。そして、動作主が自分の動作を述べる場合、自分の動作を「実現が不明」であると捉えることは「実現が明らか」より少なく、①の意志動詞（無標の動詞）が基本である。そして、「実現が不明」の場合は、②③が基本で、その穴を埋めるのが④の実現可能である。そして、これが実現可能の用例の少ない理由であると考えられる。

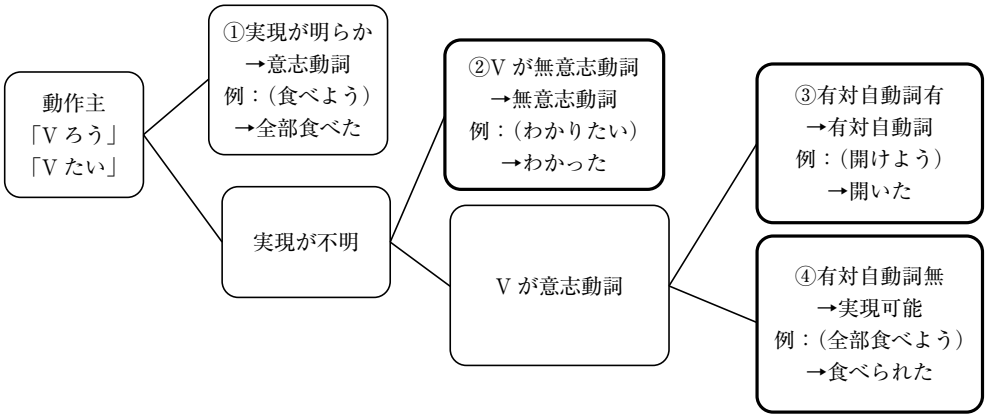

図１　自分の動作を述べる表現

5. 日本語教育における実現可能の取り扱いの一試案

最後に、日本語教育で実現可能をどのように扱うべきか考えてみたい。実現可能が、無意

志動詞と有対自動詞の穴を埋めるものであることを見た。穴を埋めるものであるため、使用頻度が低いことも述べた。使用頻度の低い実現可能は、日本語教育で扱う必要はないのだろうか。使用頻度で考えれば扱う必要はないとも言えるかもしれないが、これまで実現可能が適切な場面で提示されてこなかったことによって、冒頭の(1)－(4)の誤用が生まれているとも考えられる。つまり、(1)－(4)の誤用は、「日本語教育の隙間」によって生じた誤用である可能性があるのである。

可能形、無意志動詞、有対自動詞、この 3 つは、多くの初級の日本語の教科書で扱われる項目である。しかし、実現可能と有対自動詞は、本稿で述べた用法では扱われていない。実現可能については、潜在可能が初級の教科書で扱われるが、肯定の実現可能は扱われていないことが村上（2015）で指摘されている。有対自動詞は、「開く」「開ける」といった自動詞と他動詞のペアで、自動詞は人間の力の関与しない変化として扱われ、「自動詞ている」「他動詞てある」という文型で扱われることが多いと思われる。有対自動詞に意図的動作の結果を述べる用法があることが明確に提示されていないことによって、「あ、（瓶の蓋が）開いた！」のような文を産出できない等の問題点が多く指摘されている（張（1998）、楠本（2014）、セーリム（2014）等）。

そこで、本稿では、初級で一度学んだ形式を再度どう扱うかという問いの答えとして、中級で「動作を行う時点では、できるかどうかわからなかったが、やってみた。そして、どうなったかを述べる」という場面で、無意志動詞、有対自動詞、実現可能を一緒に扱うことを提案したい。具体的には、例えば次のような例文を提示することになるだろう。

(21)　スピーチ大会に参加しました。うまく話せるかどうか心配でしたが、
　　a.（スピーチが）うまくいきました。（無意志動詞（句））
　　b.（私が）うまく話せました。（実現可能）
　　c.*（私が）うまく話しました。

(22)　はじめてスプーン曲げに挑戦しました。やってみたら、意外と簡単に
　　a.（スプーンが）曲がりました。（有対自動詞）
　　b.（私が）曲げられました。（実現可能）
　　c.*（私が）曲げました。

(23)　先生、1 年間大変お世話になりました。日本へ来る前は、日本で勉強についていけるか心配でしたが、先生のおかげで
　　a.（日本での生活が）有意義な時間になりました。（無意志動詞）
　　b.（私が）有意義な時間を過ごすことができました。（実現可能）
　　c.?（私が）有意義な時間を過ごしました。

このような例文によって「動作を行う時点では、できるかどうかわからなかったが、やってみた。そして、どうなったかを述べる」場面では、無意志動詞と有対自動詞と実現可能が使われることを示すことができる[7)]。(21b)と(21c)、(22b)と(22c)、(23b)と(23c)の対比によって実現可能と無標の動詞の違い、(22a)によって有対自動詞が意図的動作の結果を述べる場合にも使われることを示すことができる。また、同じ場面で複数の言語形式が使われることも提示できる。なお、例文を提示する際には、(　)のように、言語化されないことが一般的であるガ格名詞も示すことも重要であろう。この案は、「可能」「自動詞と他動詞」等、文法カテゴリーに沿って学習してきた形式を「こういう場面でこういうふうに述べたいときは、こういう形式を使うのだ」と機能別にまとめて示すというものである。このように、初級で一度学んだ形式を他の形式との関係を踏まえながら整理して扱っていく必要があるのではないだろうか。

6. まとめ

本稿では、日本語教育において、初級で一度学んだ形式を再度どのように扱うのがよいか、実現可能を例に考察を行った。実現可能がのどくらい使用されているか調べたところ、無標の動詞と比較して少ないということが明らかになった。そして、その理由を実現可能が無意志動詞と有対自動詞の穴を埋めるものだからであるということを述べた。以上のことを踏まえ、日本語教育においては、「動作を行う時点では、できるかどうかわからなかったが、やってみた。そして、どうなったかを述べる」場面では、無意志動詞と有対自動詞と実現可能が使われるという提示の仕方を提案した。これは、「可能」「自動詞・他動詞」という文法カテゴリーで一度学んだ形式を「この場面では、こう言う。」というふうに機能別に整理をして扱うのがよいのではないかという提案である。今回は、動作主が自身の動作の成立を不明であると捉えるときの述べ方について考えてきたが、次は、動作主の意図しない行為が生じたことを述べる述べ方、例えば「あ、コップが割れた」や、「偶然会えた」といった文について考察していきたい。

謝辞

本研究は、学習院大学人文科学研究所の「若手研究者研究助成」(2015 年度)の助成を受けたものです。また、2016 年 5 月 7 日の第 145 回関東日本語談話会(於:学習院女子大学)において発表し、たくさんの方から有益な助言をいただきました。ここに感謝申し上げます。

注

1) ここでの可能形とは、五段動詞から作られる可能動詞(例:行ける)と一段動詞に「ラレ」がついたもの(例:食べられる)と、「できる」・「来られる」のことである。

2） YNU 書き言葉コーパスとは、『日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス』の略称で、日本人大学生（30 名）と留学生（韓国語母語話者 30 名、中国語母語話者 30 名）の 12 のタスクの書き言葉の資料、計 1080 編（母語別各グループ 360 編ずつ）を集めたものである。(4)は、自分の経験を踏まえ「入院中の後輩に励ましの手紙を書く」というタスクの中国語母語話者のデータである。

3） なお、「見る」は、可能形の「見られる」が受身との分類が困難な例があるため、考察の対象としなかった。また、「眠る」は、『初級日本語　下』の語彙リストにはないが、「寝られる」のかわりに「眠れる」が使われる可能性があると考え、入れた。

4） (12)(14)は、無標の動詞文にする際に、それぞれ主題「刀は」「素っ気ない建物のなかで暮らす自分は」を「刃を」「素っ気ない建物のなかで暮らす自分自分を」のように無題化しないと自然な文にはならない。一方、(12)(14)の実現可能はヲ格との共起は難しい。これは、実現可能がヲ格との共起を避けているものと思われ、実現可能と自動詞の近さを示唆しているように見えるが、この点については、今後の課題としたい。また、(13)は、「吹いてみたら」を削除しないと、無標の動詞文にはできない。これは、「X たら、Y た」が「たら」の確定条件と呼ばれる用法で「X が成立した場面で Y を話し手が新たに認識したり、それがきっかけで新しいことがらが起こったりするような場合に使う。」（グループ・ジャマシイ 1998: 209）ものであり、後件に意図的動作が共起できないためである。

5） セーリム（2014）は、この質問文に状況を示すイラストを付しているが、省略する。

6） 有対自動詞は、意志動詞か無意志動詞かという分類では無意志動詞である。よって、無意志動詞か有対自動詞かという用語の使い方は不適切に見えるかもしれないが、ここで示したいのは、「わかる」のように動作主が行おうとする動作そのものを無意志動詞で表せる場合は無意志動詞が用いられ、「開ける」のような意志動詞の動作の実現が不明の場合、有対自動詞があれば有対自動詞が用いられるということである。

7） なお、このような例を探していくと、Ⅰグループの動詞（5 段動詞）では、有対自動詞と実現可能が同形のため、区別をつけにくい例もある。例えば、「本の通りにケーキを作ってみたら、おいしく焼けた」は、「ケーキが焼けた」（有対自動詞）なのか、「私がケーキを焼けた」（実現可能）なのかの区別は難しい。「ロープを引っ張ってみると、簡単に切れた」「レンガ割りに挑戦したら、あっけなく割れた」なども同様である。他動詞の動作主と動作主による働きかけを消去したものが有対自動詞、他動詞の動作主は消去せずに、動作の制御性のみを消去したものが実現可能で、この 2 つが同形であることは、きわめて興味深い現象であるが、詳しい考察は、今後の課題としたい。

参考文献

大場美穂子（2012）「実現可能文の用法について」『日本語と日本語教育』40 号 慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター pp.1-17

尾上圭介（1999）「文法を考える 7 出来文（3）」『日本語学』18 巻 1 号 pp.86-93 大修館書店

川村大（2004）「受身・自発・可能・尊敬―動詞ラレルの世界―」北原保雄監修、尾上圭介編『朝倉日本文法講座 6 文法Ⅱ』第 4 章 朝倉書店 pp.105-127

楠本徹也（2014）「有対自動詞可能構文における意味的組成関係―他動詞有標可能構文との比較において―」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』40 号 東京外国語大学留学生日本語教育センター pp.103-111

グループ・ジャマシィ（編）（1998）『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
渋谷勝己（1993）「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』33 巻 1 号
セーリム、パンニー（2014）「日本語母語話者にみる行為の結果を表す表現の使用傾向―実現可能場面における自動詞と他動詞の可能形―」『日本語・日本文化研究』24 号 大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻 pp.48-58
張威（1998）『結果可能表現の研究―日本語・中国語対照研究の立場から―』くろしお出版
早津恵美子（1987）「対応する他動詞のある自動詞の意味的・統語的特徴」『言語学研究』6 号 京都大学言語学研究会 pp.79-109
早津恵美子（1989）「有対他動詞と無対他動詞の違いについて―意味的な特徴を中心に―」『言語研究』95 号 日本言語学会 pp.231-256
村上佳恵（2015）「日本語の実現可能の取り扱いについて―初級の教科書の調査より―」『学習院女子大学紀要』17 号 pp.147-162
林青樺（2007）「現代日本語における実現可能文の意味機能―無標の動詞文との対比を通して―」『日本語の研究』3 巻 2 号 日本語学会 pp.31-46

資料

東京外国語大学留学生日本語教育センター編（2011）『初級日本語　下』新装改訂版 凡人社

用例出典

BCCWJ：『現代日本語書き言葉均衡コーパス』国立国語研究所
https://chunagon.ninjal.ac.jp/
YNU 書き言葉コーパス：『日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス』金澤裕之編（2014）ひつじ書房
月神：『月神の浅き夢』柴田よしき（1998）角川書店
高学：『高学歴ワーキングプア「フリーター製造工場」としての大学院』水月昭道（2007）光文社
ムツ：『ムツゴロウの人生読本』畑正憲（1988）廣済堂
ナイ：『ナイフ』重松清（1997）新潮社
八日：『八日目の蝉』角田光代（2011）中央公論新社

ENGLISH SUMMARY

Teaching another use of the same language form already taught in an elementary course in Japanese Language Teaching
Relation between the semantic function of actual and potential, non-volitional verbs and paired intransitive verbs in the Japanese Language

MURAKAMI Kae

In Japanese language teaching, when a language form that has already been taught in an elementary course, it is treated as a known item, though it has a different use; this leads to a problem for the teacher. How do we teach a different use of the same language form, which is already taught in an elementary course, in an intermediate course?

This paper proposes that we should first classify language forms in terms of their many

functions, and then teach the language forms having the same functions together. To elucidate this point, we deal with the semantic function of an actual potential as in "*sakadati-ga dekita*," which has two semantic interpretations. "*kodomonokoro sakadati-ga dekita*" is interpreted as the potential ability in the time of the past as in "I could stand on my hands in my childhood." "*kinou hajimete sakadati-ga dekita*" is interpreted as an action that has been actually done as in "I was able to stand on my hands for the first time in my life yesterday." The second one is the semantic function of the actual potential.

First, we use a corpus to illustrate the fact that only a few examples of the function of actual potential exist. Second, we clarify when the function of actual potential is used. The function of actual potential is used to fill the gaps of non-volitional verbs and paired transitive verbs. This is the reason behind there being few examples of these because the incidence of such gaps is less. Finally, we propose a teaching methodology for teaching the function of actual potential. We gather non-volitional verbs and paired transitive verbs on the same context so that an agent does not know whether or not his action can be acted upon either before or after the action, so that it effectively describes the result.

Key Words: the semantic function of an actual potential, non-volitional verbs, paired transitive verbs, the same language form already taught in an elementary course, Japanese Language Teaching